

岡田謙博士と台湾

戴国輝

はじめに

東京教育大学教授岡田謙博士が、1969年9月5日夕刻東京世田谷の関東中央病院で宿病気管支喘息の容態悪化のため永眠された。享年62才である。

博士は1930年4月に創立間もない「台北帝国大学」（現中国国立台湾大学、創設は1928年3月17日）に若年22才で、文学部講師（社会学）として赴任、1941年10月東京高等師範学校（現東京教育大学）教授に就任のため離台するまで、実に満12年6ヵ月を台湾において研究生活を過ごされた。いわば研究者としてはもっとも大切な時期を台湾において仕事をされたのである。博士と台湾の因縁浅からぬことで一文を草し、哀悼の意を表すとともに私のささやかな記念としたい。

1. 主な著作と論文

博士の主な著作を出版年次にしたがって列記すると、

①『原始社会』（弘文堂教養文庫、1939年）、②『未開社会における家族』（弘文堂、1942年）、③『未開社会の研究』（弘文堂、1944年）、④『朝日新講座—民族学—』（朝日新聞社、1947年）、⑤『理解社会学』（マックス・ウェーバー叢書、春秋社、1948年）、⑥『基礎社会』（弘文堂1949年）、⑦『社会人類学の基本問題』（有斐閣、1959年）となる。

その代表作は②の『未開社会における家族』で、本書によって氏は東京帝国大学から文学博士の学位を1947年8月に授与された。なお③の『未開社会の研究』と⑥の『基礎社会』もまた台湾に関する実証研究の直接的な所産で代表作の一環をなす業績である。その他の四書は啓蒙書とみなして良いものであろう。

以上の著作以外に、これら著作の素材となったモノグラフがかなりの数にわたって執筆発表されている。筆者が調べあげた限りにおいて発表年月日順に次にあげてみよう。

①「マックス・ウェーバーの了解社会学研究」（『社会学雑誌』第69号<1930年1月>、第70号<1930年2月>、第71号<1930年3月>）。

②「マックス・ウェーバーの宗教社会学—特に彼の儒教・道教論—」（『理想』第21号<1931年1月>、第23号

<1931年5月号>）。

③「ルフト蕃移住の話」（馬淵東一氏との共著、『南方土俗』第1巻2号<1931年7月>）。

④「ブスン族資料断片」（馬淵東一氏との共著、『南方土俗』第1巻2号<1931年7月>）。

⑤「年齢階級の社会史的意義」（『社会経済史学』第1巻4号<1932年1月>）。

⑥「青年集会所の軍事的意義」（『季刊社会学』第4輯<1932年7月>）。

⑦「未開社会における合理的なものと非合理的なもの—ツオウ族の事例について—」（『南方土俗』第2巻1号<1932年12月>）。

⑧「アミ族サクル社の青年集会所について」（『南方土俗』第2巻1号<1932年12月>）。

⑨「高砂族」習俗三篇」（『ドルメン』第2巻2号<1933年2月>）。

⑩「未開社会における集団諸形態の交錯—台湾ツオウ族における一例—」（『社会学』第5号<1933年4月>、ならびに『南方土俗』第2巻4号<1933年12月>にも掲載さる）。

⑪「高砂族に関する邦文雑誌論文目録」（『南方土俗』第2巻4号附録<1933年12月>）。

⑫「未開人における個人と社会—台湾ツオウ族の事例につき—」（『年報社会学』第2輯<1934年>）。

⑬「首狩の原理」（『台北帝国大学文学部哲学科学研究年報』第1輯<1934年5月>）。

⑭「山の人々」（『ドルメン』第3巻5号<1934年6月>）。

⑮「アタイヤル族の首狩」（『民族学研究』第1巻1号<1935年1月>）。

⑯「北ツオウ族の家族生活」（『社会学研究』第1輯<1935年7月>）。

⑰「台湾北ツオウ族の外婚について」（『社会学研究』第1輯<1935年7月>）。

⑱「原始社会における社会関係」（『台北帝国大学文学部哲学科学研究年報』第3輯<1936年9月>）。

⑲「村落と家族—台湾北部の村落生活—」（『年報社会学』第5輯<1937年5月>）。

⑳「台湾北部村落における家族生活」（『南方土俗』第

4巻4号<1937年6月>。

㉔「酋長の権威」(『年報社会学』第6輯<1938年>)。

㉕「台湾北部村落における祭祀圏」(『民族学研究』第4巻1号<1938年1月>)。

㉖「原始家族—ブヌン族の家族生活—」(『台北帝国大学文政学部哲学学科研究年報』第5輯<1938年9月>)。

㉗「紅頭嶼ヤミ族の社会組織」(奥田 彧, 野村陽一郎氏と共著), 『社会経済史学』第8巻11号<1939年2月>)。

㉘「北ツオウ族の家族生活」(『家族と村落』第1輯<1939年4月>)。

㉙「紅頭嶼ヤミ族の労働と漁撈」(奥田彧, 野村陽一郎氏と共著, 『社会経済史学』第9巻2号<1939年5月>)。

㉚「原始母系家族—パンツァハ族の家族生活—」(『台北帝国大学文政学部哲学学科研究年報』第6輯<1939年11月>)。

㉛「南支那における家族と村落—厦門島の村落生活—」(『台湾時報』第23巻第9号所載<1941年9月>)。

㉜「民俗について」(『民俗台湾』第1巻1号<1941年7月>)。

㉝「紅頭嶼ヤミ族の財産制」(奥田彧, 野村陽一郎氏と共著, 『社会経済史学』第11巻7号<1941年10月>)。

㉞「パイワン族における家族」(『民族学研究』第7巻3号<1941年12月>)。

㉟「未開成層社会における家族」(一)(『東亞学』第6輯<1942年8月>)。

㊱「未開成層社会における家族」(二)(『東亞学』第7輯<1943年3月>)。

㊲「座談会, 柳田国男氏を囲みて—大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命—」(出席者: 柳田国男, 橋浦泰雄, 岡田謙, 中村哲, 金関丈夫『民俗台湾』第3巻12号<1943年12月>)。

㊳「海南島黎族の社会組織」(海南海軍特務部, 1944年)。

㊴「民族学における歴史的立場—石田英一郎氏の批評に答ふ—」(『民族学研究』第12巻2号<1947年10月>)。

㊵「民族学における個人的記録の問題—クラックホーン教授の所論を中心として—」(『民族学研究』第12巻1号<1947年7月>)。

㊶「アタイヤル族の社会構成」(『現代社会学の諸問題—戸田貞三博士還暦祝賀紀念論文集』弘文堂<1949年2

月>)。

㊷「特集, 社会調査—座談会—」(岡田氏は司会をしたばかりでなく“台湾の現地調査”についても報告『民族学研究』第17巻1号<1953年2月>)。

㊸「台湾」(『日本民族学の回顧と展望』日本民族学会編集, 日本民族学協会発行<1966年3月>)。

㊹「皇民化問題に就て—新体制と台湾の社会—」(掲載誌不明, 執筆年は文脈からほぼ1940年頃と推測できる)。

岡田氏はなぜか自分の代表作を含める単行書の成立について多くを語ろうとしなかった。このため後学のわれわれが、氏の学問を辿ろうとしても、困難が重々でなかなか骨が折れる。そこで思いついたのは筆者なりの岡田博士著作目録の作成である。

2. 研究の経緯

それはさておいて、前記の著作目録を一覧するに、博士が辿ってきた研究の道と、その実証研究の扱った研究対象を次のごとく整理できるものと思う。

博士は1929年東京帝国大学社会学科を卒業し、大学院に一年在籍してから台湾に赴任、この間研究者としての習作の業績が、マクス・ウェーバーの社会学に関する諸論文である。

氏自身の思出によると(注1)この間の読書はウェーバーの他にデュルケムにも大いに学んだといわれるが、デュルケムに関しての形のととのった直接の論文は発表がなかったようである。前掲の回顧談の中で岡田氏は当時の社会学教室の雰囲気や「いわゆる理論的、抽象的に対する反省の出来上った時代……、やはり理論というだけの意味でなく、結局事実の中に理論、事実を基礎づけている理論、事実と共に動いている理論をつかんでゆかなければならない」と伝え、氏はウェーバー、デュルケムに「その中に流れている思想……事実を通してある理論をつかむ」ことを学び「殊にデュルケムの面から教えられるところのものは、やはり後で何か事実をつかむ時、確かに役立つ」といわれる。

1930年氏自身がどのように全く偶然の機会に台湾にゆくことになるわけで、異民族(漢族系台湾人もしくは高砂族系(注2)台湾人)に特別な学問的興味を抱いていたのでもなく、ましてや主体的な問題意識を確立して台湾に赴任したのでもなかった。

若年22才、大学を卒業して1年しかたない研究歴のきわめて短い当時の氏に多くを望めないのもまた当然なことであろう。

昭和恐慌、就職難の大状況下で台湾に大学の教職を得られたこと自体きわめて幸運であったとも想像できよう。

氏は一面理論的なものへの強い執着と種々実証的なものに向いつつあった、時の学界の風潮に、むしろ台湾にその実証の field を見出されたのではなからうか。

この実証の field としての台湾において氏が選んだ対象は異民族の多数派ではなく、むしろ少数派の高砂族であった。

いつか機会をみつけて博士になぜ多数派の漢族系住民でなく少数派の高砂族系住民を研究対象に選んだかを質したかったのであるが、今やこれがかなえられなくなったのはかえすがえすも残念であると、本稿を書きながらも思っている次第である。

衆知のように、氏は名著『家族構成』（弘文堂、1937年）を著した戸田貞三博士の門下生の一人であるし、文献研究ではあるが『支那家族研究』（生活社、1944年）の著者牧野巽教授の同窓で知友でもあった。また当時の台湾の社会調査、例えば人口調査、土地調査、旧慣調査の何れをとってもその調査の性格と調査の意図は別としても、遙かに日本の国内に比べて進んでいたし、国勢調査がごときは、日本国内における第一回調査が1920年であったのが、台湾ではその年は第3回目、第1回目は1905年には早くも行なわれていたにもかかわらずである。勿論戸田、牧野両著共に1937年以降の公刊であることから直接刺激をうけることがなかったとも時間的な表面上の理由としていえなくもないが……。

それはともかくとして岡田氏は自ら台湾における研究の展開を「私は偶然の機会に台湾にゆくことになりました、そこでまた何とかして見ようと思ひ立ちました。当時デュルケムあるいはレヴィ・ブリュール (L. Lévy Bruhl) のものを読んだりして、何かそれに関連のあるものを考えていた時、……関口さんが、台湾の青年集団の問題を採り上げまして、これをデュルケムの見方からやってみると私に資料を教えられたことがありました。…その資料を勉強している中に、これは何とか青年集団をやってみようという気持になり、そういう気持で向うに参りますと早速シュルツ (H. Schurtz)、ロウイー (R. H. Lowie) を研究し、未開社会には単に血縁的なものばかりではなく、地縁的なもの機能的なものが並存すること青年集団も血縁的でない重要な集団であること、そういうことからこれを一つ実際に当て見ようとして、所謂青年集団のはっきりしている社会にはいったのでありま

す。……その頃の私のやり方はやはりその頃の習慣が決定して来ると思うのですが、また、デュルケムが何度も言っている言葉にヒントを得たのですが、百の事実を集めるよりも一つの事実を掘り下げて見ることが学問の神髄だということは何度もいっている。そういうような影響も受けている…その頃ラドクリフ・ブラウン (Radcliffe-Brown) の影響も受けたと思います。要するに事実を離れた理論でなく、事実の底にそういうものを見てゆきたい。それが出来るものかどうか見当がつかないのですが結局それを進めてゆく、未開社会であろうと文明社会であろうと、共通の原理をもっている筈でそういうものをつかんで見たい。それが比較社会学の一つの行き方ではないかと思いました。』(註3)

上記からわれわれは博士の第二段階における理論研究はウエーバー、デュルケムに加えてブリュール、シュルツ、ロウイー更にはラドクリフ・ブラウンを学んだことが分る。そして最終的には「私はウエーバー、ラドクリフ・ブラウンに続く線ではなかったか、私は自分のやって来た社会学はまずそれに近いものである」(註4)と自ら位置づけているのである。

氏の理論的研究は、単線的に進められていたわけではなく、次に紹介する実証的研究と交叉しながらそれらは積みあげられたことはいう迄もない。

「最初に青年集団に当たったところ、個々の社会によって青年集団の形が違う。それを見るためにやはり家族の実際の生活、そして民族の問題といろいろ扱ったのであります」(註5)ここでいう青年・家族・民族研究は当初あくまで高砂族にとどまったものであった。

漢族系の家族・村落にも関心をもたれ、実態調査を実施するのは1934年頃になってからのことである。その動機と問題意識について氏は「当時、台湾村落の社会組織について関心を持っていた筆者は富田氏 (芳郎) の研究にヒント(註6)を得て台湾北部の散居型居住様式を採る村落の社会生活が、どの様な集団基礎の上に営まれるか、またいかなる範囲に亘って社会的交渉が行なわれているか、言葉を換えて言えば、台湾北部の村落の社会集団の性質と社会圏の範囲をきめることが大切であると考え、1934年頃から台北市に近い士林街の調査を行なった。その結果、住民の通婚範囲、市場圏、祭祀圏などが重り合って、所謂 Rural Community に当るものを形成していることを知り得た。」と記している。(註7)この実地調査の成果は1937年に発表された「台湾北部の村落生活」と「台湾北部村落における家族生活」(筆者の作成した氏

の論文目録<以後、論文目録と略称>の⑩と⑪論文)ならびに1938年に発表された「台湾北部村落における祭祀圏」(論文目録⑫論文)である。

論文の発表もしくは実証的研究の実施においても、漢族系台湾人についての研究は上記以外のものはなされなかったようである。

次にわれわれは氏の台湾在任期間中の第三の研究対象についてふれることとしよう。時期は目下のところ筆者には調べがついていないが、蘆溝橋事件以後、戦時体制の要請で、漢族系台湾人の中の閩南系住民の本拠であった福建省に現地調査に行き、1940年にはその成果として「南支那における家族と村落—厦門島の村落生活」(論文目録⑬論文)を脱稿する。本論文の脱稿の翌年には更に金関丈夫氏の呼びかけに応え「民俗台湾」(1941年7月発刊1945年1月終刊計43号)の発起人の一人に加わり、同誌創刊号に「民俗について」の随筆風な小文(論文目録⑭論文)と「大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命」という題で柳田国男氏邸において行なわれた柳田氏を囲む座談会<1943年10月13日開催>(論文目録⑮論文)に参加した他、唯一の友人同仁といわれながら(注8)ならんら寄与するところがみられなかったのである。

(因みに『民俗台湾』誌は高砂族系住民よりか漢族系住民の文化の諸相の発掘と記録に重点がおかれていた雑誌である)。

論文目録にもみられるように、これら漢族系社会に関する調査研究を間にはさみながら、博士の高砂族研究は継続実施されていた。

筆者が博士に質したかった第2の問題に「先生はなぜ台北帝大の土俗人種学教室グループ(当初故移川子之蔵博士が教授、宮本延人氏が助手で、馬淵東一氏が臨時囑託であった)と共同研究を組めなかったか」がある。

岡田氏の初期における実地調査は馬淵氏を案内役にしていた(注9)こともあってか、氏の初期における高砂族関係の資料紹介の小論文(論文目録③と④論文)は馬淵氏との連名で発表されていたが、その後移川グループとの共同作業はみられなかった。共同研究を組めなかった理由は局外者のわれわれには知りようもないが、今日の時点で見ると、切磋商磨の機会を失ったことによる高砂族研究の学界における損失は計り知れないものがあるように思うのは筆者一人ではなからう。特に岡田氏の学問の発展にとって大きな阻礙要因の一つとなったことは明白な事実と考える。今後の研究の発展にとっても他山の石となりうることでついでに指摘しておきた

い。

移川グループの共同研究に加入しないで、かつ社会人類学的興味を一定程度持ちながら岡田氏は馬淵氏が「氏(岡田氏のこと)の調査は extensive でもなく、また、intensive だったともいえない、……夫々の種族の任意の若干部落に比較的短期—2~3週間—の調査旅行を行ない、ただ、北ツオウ族には確か2回は訪れている。概して1回限りの調査で、限られた地域の少数の口述者によっただけであるから、口述の内容に地域的または個人的偏向が多かったのは止むを得ないところで、相対的のことではあるが、これらの偏向を記述の上で check するには調査旅行が少しく慌しすぎた憾がある。……同氏は高砂族の目ぼしい種族について一通りの調査をまとめる方向を撰(選)んだのであった」としているような単独調査研究を続けるわけで、この種の調査についても氏自身戦後においてその困難の点について「第一は言葉の制約がある。休みの時に行って帰って来ると言葉を忘れてしまう。ある種族の言葉を覚えても他には通用しない。言葉は簡単な会話が出来る程度で詳しいことは通訳にまたなければ出来ません。……この言葉の制約は非常に不利な点があると思います。」(注10)と述懐している。現在の学界の常識では、休みの時に行って帰って来ると忘れてしまうかもしくは、簡単な会話程度の語学力(この語学力は岡田氏の才能の限界の問題ではない。植民地統治関係を媒介とした多くの台湾研究の例にもれず、30代以前の氏にさえ被統治民族の言葉をまともに学ぼうことを心の中から要請することが少なかった、まさに研究姿勢がもたらしたいびつな結果でしかないのである)ではお話しにならないわけであるが、それはさておいて、その後の共同研究は、氏が台北帝大農学部において農村社会学をも講じていることでか、当時の台北帝大農業経済学教室の奥田彥氏ならびに野村陽一郎氏との紅頭嶼ヤミ族に関する研究(論文目録⑱、⑲と⑳)を1939年以降に発表した他台湾に関する研究には見られなかったのである。

すでに言及したように岡田氏は1941年10月に日本本国に転任する。転任以後台湾に関する論文発表はあったが実地調査研究は行なわれなかった。

行なわれなかった理由は考えるに、台湾に長期出張の機会がなかった上に、時局の急速なる進展によって問題関心が移ったことが一つと、二つにはこれ迄の発表論文を『未開社会における家族』と『未開社会の研究』の両代表作にまとめるに忙殺されたことのようにである。

時局の急進展に伴う「日本帝国主義」の岡田氏に対する要請は、「海南島における理察政策の一資料を得んがため、黎族社会組織および経済組織の実相を究めんとするにあつた。」(注11) 岡田氏と当時東京帝国大学講師尾高邦雄氏は共に海軍の囑託に委嘱されての現地調査で岡田氏が社会組織を尾高氏は経済組織を担当された。その際の問題意識を尾高氏は、前掲(注⑩の引用文)に続けて「海南島は果して第二の台湾たり得るや否やの如き将来の大問題は兎も角、差当ってその治安、その開発のためにも、同島原住民たる黎族の社会並に経済の実態を審かにすることは、いまや緊急の課題である。治安策としては黎界をもって漢族殊に敵匪に対する緩衝地帯となし、(傍点引用者) 軍事基地背後の安定を図るべきであり、開発策としては、黎界資源の利用のみならず、黎族そのものをして開発労働力の補給源たらしめねばならない。しかるにこれらの政策を十分に遂行せんとすれば、まずもって黎族事情に関する学術調査を必要とし、別してその社会並に経済事情に関する社会学的実態調査を必要とする。」と述べている。

本調査は1942年11月26日から同12月20日までの25日間におわたって実施され、調査地点は「一には比較的治安のよきこと、二には主要黎族居住地帯の一つなる」ことで「海南島楽東縣重合盆地を選び、現地海軍陸戦隊兵舎をもって調査拠点とし」た。本調査もまた当時期のその他の実地調査と同様に日本帝国軍隊の庇護のもとで行なわれた。尾高氏によると「調査地にあつては陸戦隊員と寝食を共にし……それぞれ一組宛の通訳」(注12)の提供を得たとある。(なお本調査に先行して、当時の台北帝大教授金閔丈夫と浅井恵倫両氏による人類学的(解剖学的)および言語学的調査が行なわれた<1942年4月~6月>)。(注13)

上記から海南島の黎族に関する調査は、台湾における研究の延長と見なしてしかるべきであることでとりあげた。黎族は岡田博士にとっての第四の研究対象であるばかりでなく、博士自身が実施した最後の実地調査でもあることで記録に値しよう。

3. 業績の評価と批判

岡田氏の業績に関する全体的な位置づけと評価は後学のわれわれの今後の課題であるが、これまでも、博士の業績に言及したものが無いわけではない。以下に紹介するのがその主なものである。

蒲生正男氏は「社会人類学—日本におけるその成立と

展開」(注14)の論文において「社会人類学的な問題意識を明確に保持しながら、未開社会の調査を実施した多くの研究のなかで、最初に公刊された研究の荣誉は岡田謙の高砂族の年令階級に関する研究に与えられるであろう。岡田はフランス社会学に造詣の深かった田辺寿利の影響をうけて Mauss, M. の学説に接し、年令階級制度の普遍性について共鳴し、加えて秋葉隆から Malinowski 流の intensive method を習得し、高砂族の実証的研究を意図したものである。20世紀初頭に展開された年令階級論は、学説史的にみて19世紀以来の血縁集団先行説に対する反省と批判の意味をもっていたが、岡田の研究の動機にもこうした学説史の底流があった。岡田はこの論文において Schurtz, H. の学説を紹介し、加えて Schurtz 批判の諸説をみながら、ツオウ、アミ、プユマの諸族の年令階級の事例を報告している。その結論はアミ、プユマの両族においては、未婚青年に対して性生活の禁制があり、Schurtz の説くがごとく青年集会所と性的放縱(縦)の関係は誤りであると指摘した。年令階級の問題から出発した岡田の研究は、血縁集団と地縁集団の交錯という現状分析に興味を示し、血縁と地縁の併行説の理論的な処理に苦慮しながら、その一つの解答として個人的差異の機能を提起したのでないかと思われる。岡田のいう個人的差異は、社会の変化・発展・変容に重要な役割を演ずるというものであり、「社会の集団的特徴に附加されている個人的色彩を明らかにすることがその社会の本質を知るうえに重要である」という見解となっている。…(『未開社会に於ける家族』の公刊)は未開社会の実証的研究として当時類書の出現しなかった時代に果した意義は極めて深い」と評価する。蒲生氏は評価に続けて「家族そのものの理解には馬淵の指摘(後述参照、引用者)する点も含めて若干の疑問を抱かざるをえない。岡田が現代家族学説にすぐれた学識を有しながら、戸田貞三の前世紀的な Desk Work によって構築された家族論を前提とすることによって、現代社会人類学における家族論との断層を形成したのは惜しまれる。」とも批判する。

社会人類学、社会学(特に家族論)にも疎い筆者に岡田氏の学問に対する評価も批判も出来ないが、蒲生氏の評価と批判に対しては、私なりの疑念がないわけではない。疑念の第一点は、蒲生氏がいう「秋葉隆から Malinowski 流の intensive method を習得し」云々は、岡田氏が本当に習得し、intensive method を行使した調査研究を実施したのかに対してである。「『未開社会に於ける家族』が未開社会の実証的研究として当時類書の出現し

なかった時代に果した意義は極めて深い」と蒲生氏は評価するが、その果した意義が奈辺にあるのかははっきりしないことに対する疑念、これが第2点である。岡田氏の代表作の一つである『未開社会に於ける家族』の素材となった一連の実証研究、特にその実地調査が正確であったかの検討を抜きにした蒲生氏の発言を字句に読む限りでは、評価は正鵠を射ることはおぼつかないし、その公刊の先駆的意義もまたたんなる先に「公刊」したことでこのような実証研究もまた可能である刺激を後学に与えたことにしかならないのではなからうか。第三の疑念は蒲生氏の批判とは全く逆に筆者は台湾研究者の一員として岡田氏に期待したかったのは氏の恩師戸田博士の手法で台湾にある既存の諸調査報告特に国勢調査（1920年にはすでに三回目の調査が行なわれた）もしくは人口調査を十分にこなして台湾における「家族構成」を研究完成でもして頂けたら、日本と台湾の比較が十分正確に且つ可能となり、学界に対する貢献度もまたより大なるものとなったと望望の感深しとするものである。Desk Workでも研究対象に対する土地感もしくは生活感があつた上で、正確な調査統計の資料にもとづくものであれば、extensive, intensiveの何れでもない、かつ偏差を十分にチェックできない名だけのfield workを基にした研究よりかは良い成果がでると思うものである。第4の疑念は蒲生氏は「現代社会人類学における家族論との断層を形成したのは惜まれる」とするが、社会学出身の岡田氏の内部にある社会学と社会人類学のズレもしくは葛藤に対する言及がないまま（恐らく紙数の制限によるものとは思ふが）惜しまれているのはいささか片手落ちの感がしてならないのである。

岡田氏に対する批判が最も激しいのは同じ社会人類学で高砂族研究をほぼ同じ時期に始めた馬淵東一教授によつてなされるものであろう。

馬淵氏はまず「調査研究成果の発表という点で、遙かに勤勉であつた」(註15)と言外に含みをもたした形で批判を始めているが、本格的な批判の前においては「『未開社会に於ける家族』(昭和17年)は、当時のわが国の社会学会では注目に価するものだったといえる。現在でさえ多分にそうであるように、未開社会に関し19世紀の古典人類学へあまりにも偏重するわが社会諸科学または文化諸科学のうちにあつて、当時の若干の“実証的”社会学者は、概論書または翻訳書を通じて、海外の一層新しい未開社会研究の紹介を多少試みつつあつたが、実地調査に乗出す人は稀有であつた。」と記し、当時の稀有の

例の一人としていわば実証調査に乗り出した岡田氏の実証性を評価しているようである。

しかし岡田氏の実地調査の方法論等については「同氏の調査はextensiveでもなく、また、intensiveだつたともいえない。恐らく健康上の理由もあつて、夫々の種族の任意の若干部落に比較的短期—2~3週間—の調査旅行を行ない、ただ、北ツオウ族には確か2回は訪れている。概して1回限りの調査で、限られた地域の少数の口述者によつただけであるから、口述の内容に地域的または個人的偏向が多かつたのは止むを得ないところで、相対的のことではあるが、これらの偏向を記述の上でcheckするには調査旅行が少しく慌しすぎた憾がある。これは特にブヌン族に関する記述において著しく目立つように思う。社会学教室の出張費だけでは長期の旅行には自ら制約があつたにしても、毎年のように自己のプランで規則正しい調査旅行を行ない得たのであるから、特定種族への“波状攻撃”も可能だつたわけである。しかし、同氏は高砂族の目ぼしい種族について一通りの調査をまとめる方向を撰(選)んだのであつた。」と批判する。馬淵氏は更に岡田氏の家族論についても「同氏は機能主義、殊にRadcliffe-Brownのそれに著しく接近するものごとくであるが、他方に、社会制度としてよりむしろ社会集団として家族を把握せんとする、その恩師なる戸田貞三博士の立場を多いに採り容れる。例えば、「…その集合的事実そのものから生まれて来る合一感一体感が家族の生活を支配し、あらゆる面に共同行為を可能ならしめている……」のごときは、このことを簡明に表明するものであろう。但し、この立場では社会人類学的研究を首尾一貫して押し通すにはかなり困難があるかも知れない。岡田氏は、家族に双系性を認めんとするものの如くで、しかも小家族の重要性を強調すると共に、「家族は氏族・親族の原型としての意味を持っている」という。ところが単系的な氏族の基礎となるような家族は、双系的でなく単系的であらねばならず、そのような単系的な家族、すなわち父系家族または母系家族を考えるならば、そこでは集団としての家族というよりは制度的な問題にしなければならぬであろう。」と指摘批判するのである。

馬淵氏はまた岡田氏の最大なる代表作で、学位論文でもあつた『未開社会における家族』についても注文、批判、評価を「この著書を一覧してまず感ぜられるのは、当時わが国の学界で次第に抬頭していた農村社会学の調査要領を多分に採りいれている点である。著者自身も、

他方では漢族系の台湾人の農村についてこの方面の調査を行っていたし、大学でも農村社会学を講義していたのであった。いわゆる社会人類学と農村社会学とでは学問上の狙いが互いに多少ズレていて、研究態度にもかなりヒラキがある。どのような形で両者の接合が可能であるかについて更に問題があろうが、本書はこの種の試みに一歩踏み出したものとして注目されるであろう。そして、家族生活の背景をなす社会生活諸部面、更に気象や農業工程など、記述は多岐に亘り、量的には家族自体に関する記述をむしろ凌駕する位である。この点だけからいえば、本書はむしろ“台湾3種族における社会生活概要”とでも表題を附せらるべきであったろう」と述べる。その一方で岡田氏の社会学と社会人類学の氏の著作における接合に関連しても「氏の著書を読んで感ぜられることは、いわゆる社会学と社会人類学乃至は社会民族学との間に、多少とも注目すべき距離があるのではないか、ということである。例えば、社会学では家族構成や親族関係を扱う場合に、氏の著書でもそうであるように、伯叔父、伯叔母、従兄弟姉妹、甥姪、孫の如き Category に従う。官庁の統計を利用したり、また世代関係とか、直系親・傍系親の別を問題にする限りは、それでもよいわけであろう。しかし、社会人類学や民族学で論議せられた家族関係や親族関係に関する諸問題を取り上げるのには、このような Category は適当ではない。それは Lowie の Lineal type, Murdock の Eskimo type に属する親族名称体系に該当し、ヨーロッパ諸語や、日本では大体この要領で直系親と傍系親を区別しながら、父方親族と母方親族とを同じ分類に組入れる様式なのである。岡田氏が官庁統計その他に基づいて作成した種類の統計は注目すべきものを数多く含んでいるが、同氏が以上の点に一層関心を有したならば、それは社会人類学にも極めて有意義であったであろう。」と言及する。

馬淵氏の岡田氏に対する批判と評価の最後は「同氏は統計的方法の重要性を強調し、相当効果をあげているに拘らず、部落や村落を越えて部族や種族に関する一層広い見透しに比較的恵まれたい調査条件のためか、これらの統計が広い地域に亘る場合、それを処理する上に多少とも handicap があつたように思われる。しかしこれらの諸点は別として、岡田氏の著書はわが国の社会学においては確かに啓蒙的なものであったといえる。しかもわが国は社会人類学の基礎が確立されておらず、且つ、最も密接な関係にあるべき社会学との提携や相互刺激が不十分であつたことにかんがみて、岡田氏の著書は双方

の学問の橋渡しへの試みとしても注目に値するであろう。」と締めくくられてある。

寡聞ではあるが、上記の諸批判に対して岡田氏が論文の形をとって反論した記録があることを知らない（学会で岡田、馬淵両氏が激しくやりあつたことは聞くが、それ以上は知らない）。

馬淵氏は台北帝大の第一回の卒業生（史学科、1931年3月卒）でかつ移川子之蔵博士の「土俗人類学」^(注16)教室の最初で且つ最後(?)の俊才であつて、卒業後も一時期台北帝大に奉職もしたことがある。事実岡田氏の初期の実地調査の案内までやっていたし、論文目録にもみられるように岡田氏の高砂族に関する最初の二小論文は馬淵氏との連名で発表されてある。学界においては不遇であつたが、仕事(特に)実地調査の機会に比較的恵まれ、高砂族の社会人類学の研究業績を戦後においても活発に発表しておられる。いわば岡田氏の身近かにいた馬淵氏による岡田批判だけに説得力はあろう。われわれが馬淵教授により一層期待したいのは「紳士の争い」であるべき学問上の論争の観点から、「未開社会における家族」だけでなく、その他の業績、特に個々の実地調査報告にわたつても教授自身の実施した extensive ならびに intensive field work との違いにまで指摘批判、位置づけが行なわれることにある。

日本民族学会の戦後における二大企画(台湾研究を含むものとして考えた場合)である「特集、社会調査一座談会」と「台湾研究特集」において両雄が相まみえなかつたことからくる学界の損失を償うことに切なる願いを持っている後学の徒の一人として上記の要請をしたいのである。

岡田氏からの反論を聞くことができない現在、氏の知友で岡田氏にも多くの学問的影響を与え、自らも高砂族に関する宗教社会学的調査を実施しかつ『高砂族の祭儀生活』(1945年)をまとめられたことのある古野清人教授に、岡田氏の学問を語って頂くことに強き願いをもつのは筆者一人ではなからう。その場と機会が1日でも早くくることを希望したい。

む す び

素人の「醜」をさらけ出すことを敢て辞さないで本稿を書いてきた。岡田博士の諸業績を流覽する過程で、あのすざましく荒れ狂つた「軍国主義」下において、よくここまで社会学・社会人類学の「学問」の世界に身を保てたもんだと痛感すること一度ならずであつた。

筆者の手元にある唯一の時事論文④「皇民化問題について—新体制と台湾の社会—」における氏の発言もまた氏の社会学・社会人類学の立場からはみ出ることきわめてすくないと筆者には読める。

おっちょこちょい「進歩的学者」にみられた筆の汚れ、口の汚れの類いはほとんど見出すことができなかつたのは十分敬意を表されてしかるべきであろう。

「学問」の世界において「明哲保身」（原理的には古い中国人の解釈とは違うのだろうが、実質的にはそうだったと筆者は見る。）に生きたのは、氏が社会学者であったからなのか、敬虔なるクリスチャンだったからなのか、ウェーパーに心酔したからなのだろうか、もしくはその総合として……。いずれにしても岡田氏は時の体制の要請で華南の村落と海南島の黎族の研究に動員はされたが、尾高邦雄氏の様な「明確な時局的問題意識」についての言及はついに見出すことをわれわれに許さないのである。（大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命の題で行なわれた、柳田国男氏を囲む座談会<論文目録④>の岡田発言と中村哲発言を比べると良い）実に見事という他ない。

それにしても社会学出身で台湾に赴任した年の10月に世界を震撼した霧社事件もしくは当時性病に浸れ、絶種の恐れもまた出つつあった高砂族の窮況について公的に発言されることがなかった（筆者の知る範囲内において）ことは前記の「学問的立場」の堅持と無関係でないかも知れない。

柳宗悦氏が短い訪台で（1943年3月9日～4月21日）^(注17)「1. ここに1個の美しい品物があったとする。見る人はとかく美しい姿だけを見て了ふ。謂ば示された結果からのみ、その美しさを眺めて了ふ。さうして只それを味ふことに悦びや誇りを感じる。

たがそれではいけない。そこに終ってはいけない。美しさと云ふ結果が、どんな原因から生れて来たかを見守る必要がある。作られた物を通し、それを形作る材料や作る時の手法や、又招かれてある用途のことを思ひみる必要がある。更に又それを作る人達の生活や信仰、又それを作らせる社会やその組織をまで訪ねてゆかねばならない。結果に驚きがあるから、原因には一段と深い不思議が潜むであらう。物の美しさを結果でのみ受け取る人は、本当に美を見つめている人ではない。趣味家に浅い見方の人が多いのは、奥にひそむ事に近づかうとはしないからである。

2. 高砂族の織った織物を、美しいと見る人は多い。

併しそれを産んでくれた人々に驚きを感じる人が稀なのは不思議である。彼等を未開人と軽蔑してゐる人は、その布の美しさを知ってゐる人とは思へない。ましてあんな原始人にどうしてこんな美しい布が織れるのかと考へる如きは僭越の至りである。さうして又、なぜこんな事が吾々に容易に出来ないのかと考へる如きも、うぬぼれから来るのである。吾々には出来にくく、彼等には出来る力が当然あるのだと、そこまで考へてくれる人が稀なのは淋しい。美しさの魅力は、現れた姿よりも、匿れてゐる力にこそ潜んでゐる。物に驚きがあるなら、それを産んでくれる人に、一段と驚きを感じられねばならない。物のみを愛して、人に冷かなのは、真に物を愛してゐない証拠ではないだらうか。」^(注18)と記録してきているのに比べると一沫のさびしさを感ぜざるを得ないのは筆者独りであらうか。

高砂族の青年組織、家族、氏族を含む社会組織の実態をあるがまま（事実は言語や調査方法等の問題からかなりの留保が必要であると思われるが）記録し、公に明らかにすることにとどまらざるを得なかつたのも、当時の状況では仕方がなかつた一面もあらう。しかし戦後においてもなんら「民族の魂」にふれるような発言がみられないのは如何様に解釈すべきものであらうか。

外国研究（特に後進国研究）に従事しているわれわれの汲みとるべき教訓は意外にも岡田謙博士と台湾とのかわりのないかわり方に源泉があるのかも知れない。終りに、「理論を事実には押附けるのでなく、理論乃至仮説を事実によって検討する」ことを強調したわりには、言葉や、宿病等の理由で十分現地調査を実施し、事実を把握できなかったことと、比較社会学の体系の構築を念願としながら、構築の素材を十分に自らととのえないうちに病痾との闘いに敗れ、早逝された岡田博士に衷心から御冥福をお祈りし稿をとじた。

付記、本稿を書きあげる過程で『民俗台湾』の編集者であった池田敏雄氏（現平凡社）、泉靖一氏（東京大学教授、同東洋文化研究所長）、ならびに宮本延人氏（東海大学教授）に種々御教示を頂いた。特に池田氏には、先に岡田博士所蔵台湾関係コレクションの弊研究所への譲渡にも御助言、御協力を頂いた。併せて謝意を表するものである。

（注1）「特集、社会調査—座談会—」（『民族学研究』第17巻1号<1952年2月>）37—38頁参照。

（注2）同上、38頁参照。

（注3）同上、38頁。

(注4) 同上

(注5) 同上, 39頁。

(注6) 富田芳郎氏の研究とは「北部台湾に於ける村落居住型形成の要因に就て」(『地理学』第4巻4, 5, 6号所載「南部台湾の一部に於ける集居型農村聚落とその経営景」(『地理学評論』第9巻7号所載), 「台湾の農村聚落」(『日本学術協会報告』10—1, ならびに「台湾に於ける農村聚落の形態に就いて」(『台湾地学記事』, 第4巻2, 3号所載)などのことである。

(注7) 岡田謙「(2)台湾」(日本民族学会編集『日本民族学の回顧と展望』所載)330頁。

(注8) 「座談会, 柳田国男氏を囲みて一大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命一」における金関丈夫氏の発言(尚この発言は多分に外交辞令的なものとは思いますが……)(『民俗台湾』第3巻12号<1943年12月>)2頁参照。

(注9) 馬淵東一「高砂族に関する社会人類学」(『民族学研究』第18巻1, 2合併号<1954年2月>)98頁参照。

(注10) 前掲「特集, 社会調査, 座談会」における発言, 同誌38—39頁。

(注11) 筆者が入手した海南海軍特務部発行の岡田謙「海南島黎族の社会組織」と尾高邦雄「海南島黎族の経済組織」<1944年版>の合訂本の尾高氏の序文<同稿三頁>より。

(注12) 以上の引用は凡て上掲尾高氏の序文<同稿3—4頁>より引用。

(注13) 同上尾高序文<3頁>を参照。

(注14) 前掲『日本民族学の回顧と展望』所収31—32頁。

(注15) 以後馬淵氏からの引用文は凡て馬淵東一「高砂族に関する社会人類学」(『民族学研究』第18巻1, 2合併号<1954年2月>)101—102頁からのものである。

(注16) Ethnology を民族学と訳用しないであえて土俗人種学とした理由として馬淵氏は「土俗人種学という名称の由来は明らかでないが, 当時の学界では Ethnology の訳語として民族学という名称はすでに通用していた。しかるに台湾の民族運動に関連して, 民族学なる称呼が総督府側に喜ばれず, 土俗人種学に落ちついたとの説もある。」と伝える。上掲馬淵論文97頁注17。

(注17) 柳氏の訪台に関する記録は「特集台湾の民芸」(『民芸』第148号<1965年4月>)に詳しい, 参照されたい。

(注18) 柳宗悦「巻頭語」(『民俗台湾』第3巻第6号<1943年6月>)1頁。

なお岡田氏の略歴ならびに研究業績の紹介は氏の門下生である森岡清美氏(東京教育大学)によって(『未開社会に於ける家族』, 弘文堂, 1969年4版本の「解説」, と「訃報」, 『民族学研究』第34巻3号<1969年12月>所載)もなされている, 参照ありたい。

(調査研究部)